資料紹介

「南弘日記」――大正七年紀――

藤田裕介

一　「南弘日記」について

本稿は、国立公文書館所蔵の「南弘日記」（大正七年一月～九月二十七日（四月欠け））の紹介を行うものである。「南弘日記」は、一九九五（平成七）年六月二十二日に南弘の孫にあたる南中氏より寄託され、二〇一一（平成二三）年六月一六日に再び寄託契約がなされた。そして、同年より公開されることとなった。「南弘日記」は大正七年分以外にも、昭和二～同二十一年分にわたる日記が同館に所蔵されている。

今回紹介する大正七年の日記は、全九冊であり、和綴の冊子となっている。九月分が二冊に分かれていることと四月分が欠けていることを除き、一冊で一ヶ月分の記述がある。日記の記述は、政治的な内容から家族に関することまで多岐にわたっている。

また、南弘の伝記である南弘先生顕彰会編『南弘先生人と業績』（一九七九、十二）では、昭和二十年五月五日～昭和二十一年二月七日までの日記の翻刻が掲載されている。

本史料が、研究において活用されたことは未だにないと考えられる。(1)

二　南弘の略歴

『枢密院高等官履歴』（第七巻、昭和ノ三、東京大学出版会、一九九五）にもとづいて、南弘の説明を行う。

南弘は、一八六九（明治二）年一〇月一〇日、富山県県会議員であった岩間覚平の次男として越中国射水郡仏生寺村（現在の富山県氷見市仏生寺）に生まれ、同県二代目県会議長を務めた南兵吉の養子となる。一八九六（明治二九）年七月一〇日、帝国大学法科大学政治学科を卒業し、同年一二月

一日、文官高等試験に合格し内閣属に任じられた。そして、一八九八（明治三一）年三月一六日、内閣書記官となり、一九〇七（明治四〇）年には、行政裁判所評定官を兼任、会計課長代理を経て、一九〇八（明治四一）年一月四日に第一次西園寺公望内閣の内閣書記官長に就任した。また、一九〇八（明治四一）年七月一四日、第二次桂太郎内閣の成立とともに免職となり、一九一一（明治四四）年八月三十日、第二次西園寺公望内閣の成立とともに、再度内閣書記官長に任命された。この間、臨時制度局整理委員、衆議院議員選挙法改正調査委員を務めている。一九一二（大正元）年一二月の内閣総辞職に伴い、貴族院勅選議員に任命された（昭和一二年一二月二八日まで）。この後、政友会系の貴族院会派である交友倶楽部に所属し、政友会に協力していく。

その後、一九一三（大正三）年六月には、第一次山本権兵衛内閣下で福岡県知事、一九一八（大正七）年九月に成立した原敬内閣では文部次官に就任する。そして、国勢調査評議会評議員・都市計画調査委員・官有財産調査委員・文部省所管事務政府委員・教員検定委員会会長・法規整理委員会委員・中央統計委員会委員・教育評議会委員・臨時教育行政調査会委員・学校衛生調査会会長・行政制度審議会委員・臨時国語調査会委員等を務めた。一九三二（昭和七）年三月には犬養毅内閣下で台湾総督に任命され、同年五月には斎藤実内閣の逓信大臣に就任した。この間、国語審議会会長・貴族院制度調査会委員等を務めている。一九三六（昭和一一）年一二月に枢密顧問官に任命された後、教育審議会委員等を務め、一九四六（昭和二一）年二月八日に没した。

三　解　題

一九一八（大正七）年は、寺内正毅内閣の施政下であり、南は貴族院勅選議員として会派交友倶楽部に所属している。交友倶楽部は、一九一二（大正元）年一二月二四日に貴族院の会派として公認された。山県系貴族院議員の田健治郎は、交友倶楽部を「政友派[2]」と認識し、また南と同様に同倶楽部に所属していた水野錬太郎も「主として政友会系の人々の集まり[3]」という認識を持っていた。このことから、交友倶楽部は貴族院における政友会系の会派として見られていたといえる。しかし、交友倶楽部は政友会系の会派と簡単に説明されるのみで、その実態について取り上げられたことは、ほとんどない。それは、史料的な制約が多分に含まれていると考えられる。本日記の存在が交友倶楽部の実態を明らかにすることに果たす役割は大きいであろう。ここでは、交友倶楽部と政友会の関係を示す二つの記事を挙げてみたい。

まず、注目されるのは、一月十九日条の記述である。

時に宗像ハ我々の倶楽部に入ったのかな。所か入ろふと云ハんよ。我輩も云つて見たかどふ云ふ理か知らんか入らんよ。北里ハ来るよ。彼ハ幸倶楽部から非常に勧誘を受けて居るけれと、結局我々の所に来るよ。そふなれハよいか。彼も寺内から釘打れて居ないかな。夫れハ断してないよ。何處かに入るときにハ僕に相談すると云ふて居るよ。

この会話は、南弘と当時寺内内閣の内務次官であった水野錬太郎との間で交わされたものである。会話に挙がっている「宗像」と「北里」は、宗像政と北里柴三郎のことであり、前年の一九一七（大正六）年十二月二十六日において勅選議員に任命されていた。

この両者の任命には、政友会総裁であった原敬の積極的な推薦が作用している。一九一七（大正六）年九月二十九日に原は、寺内に対して「兼ての案たりし宗像政を貴族院に入るゝ事と、学者を冷遇する事不当に付北里柴三郎を貴族院に入るゝ事を求め」[4]て、承知させている。その後、同年十二月二十六日に「兼て申入置きたる宗像、北里貴族院議員任命の事は閣議取纏め」[5]られ、同日中に勅選議員に任命されている。

以上のような過程を経て、一九一八（大正七）年一月九日付『読売新聞』では勅選議員の所属会派について「宗像政氏は交友倶楽部に入るべく北里柴三郎氏は茶話会に不日入会する筈なり」として報じられていた。しかし、南と水野の会話では、交友倶楽部への入会は北里のみで宗像は入会を表明していないことが述べられている。

交友倶楽部が、原の推薦した勅選議員二名を勧誘していることは、政友会と交友倶楽部の関係を窺わせる一例であるといえる。

また、五月から六月にかけては大正七年の多額納税者議員選挙に関する記述が表れてくる。六月八日条の記事を挙げてみる。

十時半交友倶楽部に出掛けた。安楽か已に来て居た。和田か来て只今埼玉から帰った所た。田中源太郎ハ昨日研究会に入ることに極めたと云ふことて田嶋に強談判をしたら、政友会の人から何とも聞いて居ないので伊集院子爵から是非入る様にとの勧めもあり、知事からも同様の話があったからたと云ふから、共に田中を訪ふて色々談判の末研究会に対し返辞を差控えることゝし、帰路田嶋と相談の上、水野の紹介状を以て再び、田嶋を訪問すれハ、何とか話を付けんと云ふて居た。かゝることてハ何の役にも立たん。政友会にあっても更に安心か出来んと

云ふから原総裁から各支部へ厳命を下さすることゝし、
岡電報案を以て相談することゝし

ここでは、交友倶楽部所属の和田彦次郎が、埼玉県の多額納税者議員選挙で政友会系候補と目されていた田中源太郎が研究会入会を決定したと、同じく政友会系の現職多額納税者議員であった田島竹之助から聞き出している。その後、水野錬太郎（同年四月二十三日から内務大臣）の「紹介状」で田島が、田中を説得するように取り決めている。しかし、交友倶楽部では、田島の工作だけでは不十分と判断し、原政友会総裁に政友会各支部から同倶楽部への入会を促すように「厳命」を出させることを依頼することで一致したようである。

以上、二つの記事からみられるように政友会と交友倶楽部の関係を示唆する記事が多々存在している。本日記は、政友会系と表面上でしか言及されてこなかった交友倶楽部の実態を裏付けることができるものであるだろう。

註

（1）南弘を扱った研究は木村秀明「大正期福岡県の図書館政策とその推進者・南弘について」（『図書館学』六五号、一九九五年九月）があるが、日記についての言及はない。

（2）尚友倶楽部編『田健治郎日記』大正元年十二月二十五日条（二巻、芙蓉書房、二〇〇八）

（3）「懐旧録」『水野錬太郎回想録・関係文書』（山川出版社、一九九九）

（4）原奎一郎編『原敬日記』大正六年九月二十九日条（四巻、福村出版、一九八一）

（5）同右、大正六年十二月二十六日条

〈凡例〉

一、本稿は、国立公文書館所蔵「南弘日記」大正七年一月一日～一月二十日分を翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、読解のために適宜句読点をいれた。

一、削除された文字で判読できる場合は文字を記し、文字の削除の記号としてゝを付した。判読できない場合は、□に削除の記号であるゝを付した。

一、誤字、脱字、当て字と思われるものには（ママ）を付し、類推できるものには（　カ）を付した。

一、挿入や書き加えなどがある場合は〔　〕を用いた。

一、掲載の関係から、改行は／で記した。但し、漢詩、書籍からの引用や箇条書きと判断される場合は改行を行わなかった。

（表紙）

大正七年紀　　一月

（本文）

一日

怒濤岸を打つ〔ち〕て飛沫壇を越えて庭樹を拂／ふ。忽ち隣室の人呼。人曰、旭日将昇と夢／徒(ママ)然として醒む。〔即ち〕睡眸を摩し被を擁／し出て榻に倚る。東天の雲裏僅に紅光の閃ゝた／るを見るのみ。即辞して復床に入る。隣人復呼／て曰、旭日已昇と。余復出て見る。朝光赫々とし／て海を射るを見る、時七時。／朝餐後、還魂記を読む。寒風、榻を拂い／冷気重衣を刺す。即ち入りて几に倚り、賀／状を認む。晡に至りて僅に止む。／五時半入浴六時晩餐。牌を弄すること約／一時間、復び賀状を華し、八時漸く了す。／怠気從て生し、書を読むに墉し即爐を／擁して茗を啜る。時針九時半を点す。左／隣人既に定まり静かに、右隣笑談仍／は盛なり。／黙坐少時、常時の律を定む。尓後障を排／して之を行はん。深く自ら省みて、之を心に誓／ふ。

「十時寝に就き、七時床を出つること。

「冷水摩擦を行ふこと。風気の時ハ床中に於てすること。乾巾を以てするも可なり。

「日記を書すること。

「身体の健全を保つことに留意すること。

「病ハ必ず医に就きて之を除くこと。

「最後の勝利ハ健康にあることを三思すべし。

「返書ハ直に認むること。

「何事にも努力すること。

二日

夜来の雨ハ名残なく霽れた。十時頃達并岡／部来遊、四時頃帰る。／此夜、岡野先生の室て十時過きまて話した。

三日

朝光瞳々たり。午前又岡野先生の室て／十二時頃迫て話した。二時、共に出てゝ元田を訪ふ。／先つ碁を挑する。即ち左詩を示した。

方罫縦横雖起風手談半日又争工局前

一語先相寄賭墅君須学謝公

局に対すること数番大勝を博した。夫より時／事を談し晡に至りて帰る。／此夜、岡野先生来室。話して十二時半に至りた。

四日　此日石黒五十二来訪

曇天寒気甚し。十時牛塚、正力来遊。昼／食後相携へて岡野

先生の室に行き談笑／す。晩食を共にし、九時二十分両氏帰る。

五日

旭日赫々たり。朝食後榻に倚り還魂記／上巻を読了す。家書を認め行て停車／場の郵函に投す。帰れハ元田氏来訪。碁／を囲みて薄暮に至る。大敗す。／此地に来り日として入湯せさるなし。三日四日機を／失し遂に止む。今夜九時始めて入る。

六日

昨夜、西隣の室通宵笑語頻りに起りて／梦幾度か破る。／朝光軒に満つ、榻に倚りて還魂記下巻を読む。／実寄す所の詩を批朱すること左の如し

尋思往事奈君何二載西風鴈季過老母無言
涙先落断腸羽驛暮鳥多

昼餐後岡野先生来室話して晡に至る。風／漸く起り夜に入りて益激し。

七日

満天未た十分に晴を放たす。停午雲全く晴れ／風全く止む、榻に倚りて還魂記を読む。岡野／先生来室。話すること一時間先生帰□□。三時半／先生婦人令嬢と共に帰京の途に就かる。即ち／之を門に送る。室に帰れハ婢来りて移室を勧む。／即行李を調えて先生の室に移る。／五時入浴。客漸く家に帰り浴室漸く閑なり。晩／餐後、牌を弄す。先生最も困しとせられたる十三／枚にて完成す。録して以て之を先生に報せんとす。／此夜、家書に接す。

八日

晴色満軒潮光射窓、八時起床朝食後、榻に／倚りて還魂記を読む。晴日背を炙り、暖なること／郷国四月の候に似たり、停午読了す。／午食後元田を訪ふ。昨夜興津に去つて今夜帰／ると、即ち辞して、市中を歩して宿に帰る。榻に倚り新／聞を看了し更にMary Wardの著日本訳英国戦／の努力を読む。／今迚て、温な光を送つて呉れた太陽も次第に西に傾ひて／影かだん〳〵薄れて行く。三崎半島ハ浅紺に桃色／を帯ひた雲の下に静かに横いて居る。一帯コンクリート／の塀て涛ハ見えぬか韡々と音〔を〕立てゝ居る。海上／ハ深紺の色を漂ハして居る至て穏かてあるか、最早／一片の帆たに見えない。顧みて豆相の山を盼れハ／残陽今しも函山の一角に落ちて、僅かに夕焼〔か〕／一帯〔片〕の雲に□示して〔輝いて〕居るのみてある。大島ハ薄すぼん／やりと雲と波の間に潜て、まるて春の夢の様な形て／ある。忽ち数聲の漁鼓を聞くかと思ふと忽ち波際／に鈴乃（ママ）の聲か傳ハつた。何か漁てもあつたのか知らん。／所え三助か来て〔入〕湯を勧めた。客

か去つて風呂場か大分／不景気と見える。一つ男気を出して入つてやろふか知ら／ん。いや止めやふ、医者ハ余り入浴ハ感心せんと云ふた／から、昨夜入つたばかりだ。まー明晩のことにしやふ。／日ハ全く暮れた。電燈の光愈々明るくなつてきた。／然し、夕食までハまた一時間もある。何をしやふ。書／物を讀むのも大儀た。又洋牌た。十枚のも三度／にて完成す。幸運てハないか。膳か来た。何と早てハ／ないか。常よりか三十分も早い。是も客の減た影響／かな。食後の薬ハ二包しかない。明朝きりた。六日に出／したと云ふのに、未たつかない。一時半程の處へ三日もかゝ／つて、またつかんとハ何たる郵便事務ノ怠慢てあろ／ふか。明日午前に著けハよいか薬かないと何たか／心細い。何時も薬すきたと云ふて家内に笑ハれる／けれと、病気の時に薬かないと橈のない舟や油の／きれた機械の様な気かしてならぬ。／又、洋牌を始めた。切りかたか悪いのか好いのか知らぬか／十枚のやつかまた出来た。同じ札二枚連続したとき／に除去するものをやつたか、とふしても出来ない。約三四十／分も経て漸く本望を遂けた。／晡時漁鼓と思ふた太鼓か、夜に入りも仍ほ止まん。そ／こで婢に聴て見た所が、村祭のて十四日まて昼／夜打する由た。／又「英国戦時の努力」を讀み始めた。中々面白い。さすか／英国皇帝陛下か我珍田大使に一読を勧められ／たのも無理ハない。就中、職工共か、自分等ハ国家の為／め働いて居ることを自覚して不平のないことてある。婦／人の働きの如きも最も興味を牽かれた一である。彼等か／「小な分」を盡して居ることを覚り、塹壕にゐる兵卒／と一緒に働てゐると思惟するなとハ敬服の至りてある。／又、独逸の捕虜か此戦争ハ何れ程続くたろうと尋／たに対し、英国の一軍曹の答か実に要領ヲ得て居るて／ハないか。

夫れハ誰にも分らないか、最初の五年間ハ一番酷い

と云ふこと丈は慥た

英佛人間ノ共同動作并両国人間に十分の／了解のあることハ何より頼もしいことた。どうしても／此両国かうんと結合せねハ、とても戦を続けることか／六かしい。／百六十頁を讀んた。夜かだん〳〵更けるに従ふて／寒さか段々加ハつて来る。月か明るい筈た。唐人の所／謂月色涛聲共一楼だ。然し寒ひのて窓外を／眺める勇気も出ない。壚を擁して只た、涛聲を／聞くのみた。月にハ失敬する。／心配して居た薬ハ漸く著いた。之て安心た。／十一日の朝の分まてあるから丁度宜い。／十日にハ帰りて、十一日に再ひ額田博士の病院に行くので／あるから之て十分だ。／もう十時になるから寝ることにしやふ。あー寒い〳〵。

九日

七時頃から目ハ覚めた。下婢が書斎を掃除せない／から起きても仕方かない。空想に耽りなから、暖かな床の／中に潜つて居た。朝食を了えたのハ十時てあつた。／日ハ赫々と輝いて居る。風ハ少小あるか、海ハ至極／穏かて布帆か彼處此處を點々として景を添えて居／る。榻に倚りて又英国戦時の努力を読んた。十二／時十分過きに読み了た。／中食後、元田を訪ねたか不在てあつた。忽々帰りて榻／上の人となり天真閣詩鈔を読んた。／晩食後、会心の詩十数章を写した。明日ハ家に帰／るのた。何となく嬉い心持ちかする。中食にたべた鯖の／干物か可なり佳味てあつたから試みに二十枚計誹へた。／明日の家包とするのだ。／風も止んた。只波の音はかりか鞳々として居る。海岸の夜／ハ何處ても波の専有物た。／福田博士の国民経済講話を読み始めた。十時頃になつ／て漸く二百二頁迚て来た。未た全体のことを彼是云ふことか／出来んか、今迚ての所を以て評すれハ、あまりに通俗すき、／繋簡宜しきを失して居ると、思ハれる所も少くない。例／之学問に関する説明の如き、今少し丁寧にありたい。／王安石の話の如き余談か所々にあつて、然も方か其方が本文の説／明より長い。是ハ講習会の講話や此本の基礎を／なして居る為て、著者ハ鶏肋の感かあつて、此等を割／愛することか出来なかつたのてあろふ。夫れにしても必要／な所の説明ハ丁寧に反覆することか講習会に／採りても最も緊要のことてあるまいか。

十日

八時少し前に床を出た。天気ハ曇天らしい。窓に日光／か照り照らなかつたりだ。寒くなけねハよいか、今日ハ／家に帰るのたから、鯖の一夜干鳥渡と鞄一つ宿奴／に持たせて、六十時二十分発の汽車に乗り込んた。／小川平吉か居た。熱海からの帰りと云ふことた。藤澤／て降りた。多分、原総裁を訪ふのたろふ。一時頃漸（ママ）／と家に著いた。宮崎の妹と子供か来て居た。ジョージか／大変に喜んた。樛子の病気も余程好い。家主ハ例／に依りて梅の鉢をよこして居るか花ハ容易に開き／了ふにもない。故事読本と云ふ本か来て居たからあつち／こち読て見た。可なり面白い本た。／晩食後ラジュム湯に入りて寝た。／鳥渡記すことを忘れたか、晩食後に河原田か見舞／に来てくれた。

十一日

極めて好い天気だ。風もない、日ハ照て居る。十時半頃／車で額田病院に赴いた。十一時半頃漸く診てもろ／ふた。尿の検査てハ比重か十・〇八て蛋白ハ痕跡て／ある。先生の云ふにハ、血圧其他総てが好都合であるが、／通しかよくない為めに、多少回復か妨けられて居／る。五日分の薬を貰ふて帰

つた。／中食後、要と二人て年賀状の残を整理し／たした。四時頃永田か来た。検尿の結果ハほんの少／量のものかある。転地の日のものに比せハ、ずつと少ひ。此分／てハ自然にとれる。先つ結構てあると居つていた。／晩食後、ラジュムの湯に入りて八時過きに寝た。

十二日　土

天気ハ前日より更に好い。極く暖かた。十一時五分て大／磯へ行ふと思ふて居たか、少し窮屈であるから十二時五十分／のに延ハした。一宮か来た。十一時半頃に中食をして十二時／に車て家を出た。新橋の停車場て聲をかけられ／た。何ても貴族院議員らしい〔老〕夫婦か乗り込ん／た。其子か送て来て居た。其人と知人らしい。其結／果老夫婦とも断えす話して居た。其様子によれ／ハ吉田子爵らしい。老夫婦ハ誰か知れない芋ヶ崎／の別荘に行くのたろふた。後て吉田子爵〔余の考／ふる〕に聞いたら彼れハ福岡孝悌と云ふことた。単／に生命かあると云ふに過きない。夫れても、枢密顧問／た。伊東子爵の同院に勢力のあるのも無理ハない。／吉田子爵ハ大磯の岩崎の別荘に滞在の保科／子爵を訪ふのたろふた。宿に帰りて貴族院の宿／所名簿を見たら、慥かに〔子爵の〕吉田清風てある。車中／老夫婦に対して、吉田と云ふた。余と話し中に研／究会に属する子爵議員てあると云ふことも知れた。／而して、現に柏木に第宅を有して居るこも分つた。（ママ）／夫等の事実て吉田清風に違いのない。／元の室に入つた時に何となく寂しい感しかシた。前に／此室に居て余と現在此室に立つて居る余とハ何たか別な／人てもあるかの如く思はれた。夫れか為め室／や物と親しみが何だか少い。然是も一／利那（刹カ）の感じに過きなかつた。鞄を開けて書籍を出したり、／筆硯を調えてしまつたら、忽ち元の余に帰りつてしまつた。／東京に帰りた為に中断せられた室四回との親か復活した〔て〕／寂しみかなくなつた。／五時少し過きに湯に入つた。晩食後墺皇嗣と汎／独逸主義の一文を草了して、国民経済購話を／二十七□頁計を読んて、二百三十七頁に至つた。つまり、第／八章迄て読了したのた。／もふ十時になつたから、寝やふ。涛聲か独り寂しく／聞こゆるのみた。盛かんに打つて居た社鼓の聲もと／ふに止んしまつた、やつはり夜ハ涛のものた。（ママ）

十三日　日

昨夜ハ夢はかりみて居た為め、頭かはつきりしない。／九時漸く起きた。朝光ハ相変らす赫々と窓を射／て居る。朝食後、榻に依つて故事読本を読んた。／可なり面白い。／東京に帰りて居る間に、元田か尋ねたと云ふことだから午／後から其門を敲いて見んと思ふて居たか生憎風か／出て来た。然も可

なり強い。漁船ハ急いて照か崎に向て帰／りて来る。波の音ハだん〳〵高くなり、再ひ此室か洗い去／らるゝか如きことかなけれはよいかと、心中竊かに恐れた位て／あつた。外出ハやめた。「セテダン」の破汎独逸計画を／読んた。／五時頃、湯に入つた。晩食後、兼田秀雄から病気見舞／の手紙を受取つた。一時間計ノ洋牌を弄んだか／一度も出来なかつた。今度ハ国民経済講話にした。／九章と十章を読了した。夫れから故事読本を／読んて、地理并歳時の二章を了えた。／十時になつた。寝ることにしやふ涛ハ独り不断の力を／以て岸を打つて居る。其以外のものハ皆休すた。

十四日　月

今朝ハ少し早く起きた。昨夜、書斎を今少し早く掃／除しろと命して置いた結果た。夫れても八時てあつた。之／ハしかたかないのた。宿のもの全体か遅れたのから。／日〔は〕曇て居た。朝食迫の間に故事読本の朝廷の一章／を読んた。食後、東京の宅へ電話を懸けて薬を頼ん／た。日ハ輝いて来た。今日ハ下町の御祭た。絵葉書を求め／旁々景況を見てこや〔よ〕ふと思ふて外え出たか風かある。微／かてハあるか北風てあるから中々寒い。十銭で大磯八景の／絵葉書を買て、郵便局の手前あたりから下町へ出たか／何の事もない。只處々に小供か社鼓を打て居る計りた。／海岸の方へ出た。漁師共ハ彼處此處に集りて、国て云／ふ「さげーちやふ」を作りて居る。其数か何ても七つ計り／あつた。宿屋の前にも二つもある。寒さに閉戸(ママ)して急い／て帰りたら新聞と手紙か来て居た。藤榻に臥／ころんて読た。神奈川県の理事官の大森か尋／ねて来た。中食を共にして一時過きに去つた。／午後から日か曇て来た、益々寒くなつて来たから外へ／出ることハ止めた。独逸東方政策を二三枚(ママ)記草／した。五時になつたから湯に入つた。／晩餐後、一時間たらす洋牌を弄して見たか、やはり／不成功に終つた。国民経済講話を読み始めた。八／時頃てあつたろふ。下婢が倉皇てゝ戸を敲て、只今火／を付けましたから出て御覧なさいと云ふから急いて／出てコンクリートの塀に倚つて見た。成程燃え上りて／居る。ぱち〳〵音かする。大焔か上から大勢之を囲ん／てわい〳〵騒いて居る。〔只〕夫れ丈のことてある。寒いから直く／室へ帰つた。燃る音騒く聲ハ益々激しくなる。此聲／を聞き、彼の火を睹てハ坐るに幼少の時代か思い出されて／ならなかつた。雪の深い中を所謂深履靴をはいて村／の小供等と一所になつて、藁や竹を貫ひ集めて、宮／の前の田の中て竹を真中に立てゝ之に藁や松飾／をくつけて、夜になつて火をつけて、竹のわれる音を／聴て無上の楽みとしたものた。今現に此前にわい〳〵／騒て居る小供等ハ、即ち当時の余と同一の楽みを

／受けて居るのた。何たか懐かしい感しかしてならぬ。考／えて見ると〔とふ〕三十何年と云ふ前のことた。遅い様て早／いものた。／九時〔半〕頃に十三章迄て読み了は〔つ〕た。今日ハ非常に／勉強した訳た。明日ハ第四篇生産論に入るのた。／今日ハ通しハ二回あつた。／十時半になつた。寒さハ益々加つて来る爐に面して／居らぬ身体の部分ハ恰も水の中にても居る様の感し／かする。早く床も入ろふ。

十五日　火

朝の内ハ日か輝ひて居たか、すく曇てしまつた。井原豊作か／ら見舞の手紙か来た。尾ニ旧時の情を説てある。可愛／男た。午前と午後とて僅かに東方策三枚書いた。／昨晩から右の眼か少し変たからてもある。遅々として進まな／いこと夥しい。夫れから井原、兼田、大谷と并に樛子に宛つる／絵葉書を認めた。五時半になつた。急いて湯に入つた。／晩食後、久振りて按摩の秀助を呼んたか不在て来／なかつた。／今夜ハ読書を止めた。詩を少し許り読たり、書いたり／して見た。／九時に薬か著いた。今度ハ早い。昨日出したのもふ今日／著いた。乾利一から見舞の端書が来た。留守宅を／訪ふて始めて知つて驚いたと書いてある。新聞も一所に／来たから読み始めた。相模の記事か最も面白い。とー／どふ十時半になつた。

十六日　水

昨夜三時過きに、はゞかりに起きた。少くすると風が大分／荒れて来た。涛聲も高い。容易に安眠することか出／来なかつた。八時床を出た。／今日も曇天た。夜来の風かまた止まない。小さくハなつて／居る。寒い。午前と午後て東方策を四枚書いた。家書／と清水徳太郎からの書面か来た。五時過きに湯に入／つた。老人か先きに入り居た。僕の隣室の人らしい。碁の／相手かないかと三助に話した。三助ハ直くに余を推挙／した。夫れから、直接話か始つた。何れ其内挑まるゝこと／てあろふ。／内へ返事を出した。食後、旧稿を読て見た。当時／の有様か歴々と浮んて来て面白い。新聞が来た又／十時半になつた。

十七日　木

九時にやつと起きた。日ハうら〳〵と照て居る。こんな／ことなら、もふ少し早く起きれハよかつた。／十時頃やつと朝食をすました。貴族院の宮田／書記官へ年賀の礼を國吉へ病後の好良を共に／絵葉書に認めて、之を郵函に投した。又十銭て／大磯の絵葉書を求めた。夫れから、加藤高明の別荘／のあたりを散歩した。帰りて榻上て故事読本／文臣武職祖孫父子兄弟夫婦叔姪の六章／を読了し、夫れから几に向つて東方策三枚を草し／た。五時過となつたから湯に入つた。／晩

食か少し遅れた為め夜ハ新聞を読んて過し／てしまつた。

十八日　金

八時に起きた。朝光か室一杯になつて居る。何とも云へぬ気持／た。起つて窓を推せハ、海ハ鏡の様に平かた。古事（ママ）／読本を読んた。朝食後、内子、釜本尚剛、達吉へ／絵葉書を認めて散歩に出かけて、郵便局の横から停／車場の方へ出た。若い男の人か御辞気（ママ）した。誰か知ら／ん。どーも思ひ出せない。先の絵葉書、停車場の郵函に／投じて、帰路菊屋に寄つて樛子の土産にするのに箱／根細工の弄品を二三点を買つた。十二時た。また中／食まて一時間ある。又東方策を一枚計書いた。／中食后一時間程藤榻の下にごろりと横になりて／半睡半醒の有様て過した。また、風か出て来た。／簷前の松も迷惑相な顔して吹かれて居る。面／白そふにして居るのハ犬はかりた。然し、室内ハ相変らす／暖かい几のあたりハ日光か満ち〳〵ておる。只戸かがた〳〵／と鳴るの〔か〕少々耳障りた。どーかすると戸の隙きから／矢の様に風か来ることかある。之ハ更に好くない。榻から下り／て緊りとしめて見たか、余り上等てないからはや／やはりだめた、成る丈け隙間のない所へ背を向けて／故事読本を読んた。十三の外戚を了えた。夫れから、又／東方策にかゝつた。どーも牛歩た。大牛歩た。もふ幾日／かゝつたろふ。未た書き終らない。尤も終りぎわにハなつて来／て居る。然し、完成せんことハ事実た。どーも此の間から／眼か少々工合悪いからた。夫れてなけれハとーに書き／終つて居る筈た。／五時過きに、湯に入つた。誰も居らん。大勢一所に入るのか／慣れとなつたせいか、何たか寂しい。例の老人ハ已に入／い〔つ〕てしまつたのかな。小松先生ハどーしたろふ。老人かや／つて来た。外国の話か中々はづんた。老人も曾て洋行／したことかあるのた。明治五年の頃たと云ふことた。／晩食後、尚絅堂集を読んた。気に入つたのか七八首／あつた。青紙の片をはつて記して置いた。九時に新聞／か来た角力の方を丁寧に見るもんたから、又十時に／なつた。日記を書いたら十一時になつた。夜廻りの析／聲か寒そふに潮聲と相応呼して居る。

十九日　土

八時に目覚めた。日ハ相変らす室一杯に差し込んて居／る。風ハ更にない、一層暖かい。海ハ微かうねりかある位た。／穏やかなことた。白帆か已に沖の方に點々して居る。漁師／の内儀さん連ハ濱邊に網を乾して居る。御客てもふ／散歩にでかけして居る人も二三人見へる。かゝる雰囲／気の中に生息する人間ハ何そ暢気ならさるを得ん／やた。健康によいのも尤もの次第た。脳裡一點の塵／事なしたもの、夫れてだめなら元来身体其物が好かん／のた。焼き直すより外仕方かな

い。／朝食後、あまり暖かたから、海濱を散歩した。暖か／いことハ暖かいか、あるかないか判らん様な風たか冷たい。頚／元が冷や〳〵する。砂山の方ハ暖かい。非常に暖かい。其／代り先客が中々ある。彼處にもごろり此處にもご／ろりた。中にハ日傘て覆ふてごろりやつて居る女も／ある。以て其暖かさか知れる。／帰路に就いた。渚をちよこ〳〵と歩てくる人かある。／不思議にも余を呼ふ。誰たろふ。水野た。君ハ病気／てあつたそふな、見舞もせいて。何にさほどてもなか／つたのたよ。只た長いにハ閉戸(ママ)した。君ハどーして来た／のか。少し風引いたもんだから、何てもまた風聲／た。少し歩こふ。君歩いてよいのか。もふ大丈夫／医者ハもふどん〳〵歩けと云ふのたよ。時に君／此度の予算ハまづかつたな。そふとも、内閣ても非常／に反対かあるよ。つまり、勝田不信任たね。寺内も、もふ／此議会きりてみきりを付けねハまつくなるよ。夫れにし／ても惜いことをした。今度の予算を手際よくやつて／其上、自発的にやめたら将来の立場か好つたのた。／君、もふ帰ふぢやないか。僕の宿へ寄つて休まないか。／そふしよふ。時に巳代治ハどふ云て居るかね。彼ハね／是非、西園寺を出さなけれハならぬと云ふて居るよ。／夫人〔子〕自身ハ野心ハないのか。僕ハあると思ふね。ふん、／そふかな。僕ハないと考へるよ。彼も天下か行かんこと／位ハ、彼ハ知つて居るよ。彼ハ徹頭徹尾黒幕／の人たよ。それハそふた。然し野心ハあるよ。兎に／角彼ハいらいよ。全く努力の結果ね。講和大使ハ／誰かよかろふ。夫れハ本野たよ。本野てハいかんよ。山本／権兵衛かよいよ。夫れハ絶対にいかんよ。誰か寺／内の後を引受けるるか知らんか、非常に損をする／よ。第一、彼ハ山縣にいかんたろふ。夫れに、彼ハ独りき／りの男たよ。自分て外国のことか判る積りて居るか／ためたよ。夫れハ本野に限るよ。誰か行ても味いこと／ハないよ。本野ハ副使だよ。山本よりハ巳代治の／方かよいよ。夫れハそふとも。然し彼ハ引受けんよ。／そふてもないよ、外交調査会の如きハ独りて世／話焼いて居るよ。君、夫れハ内輪の仕事たからたよ、／彼ハ決して表面に立つことハしないよ。そふてもないよ、／見給へ、西園寺かやるときにハ、きつと彼に入閣を勧／めるよ。然し、彼ハ入らんよ。入りてくれる方か、内閣の為／め利益かとふか判らんよ。力量はあるか、何にしろ／危険の人たからな。それハそふた。時に宗像／ハ我々の倶楽部に入つたのかな。所か入ろふと云ハん／よ。我輩も云つて見たがどふ云ふ理か知らんか／入らんよ。北里ハ来るよ。彼ハ幸倶楽部から／非常に勧誘を受けて居るけれと、結局我／々の所に来るよ。そふなれハよいか。彼も寺内から／釘打たれて居ないかな。夫れハ断してないよ。

何處／か入るときにハ僕に相談すると云ふて居るよ。夫れハ／そふと君、此の間の知事の交迭ハどふしたのかな。／そふ、あれか。あれハ原や元田か八か間〔ま〕しくてたま／らいでね。とふどふ森まてやつたよ。そふかよくや／つたね。然し、内閣ハあれて損したよ。世間てハ決して／評番（ママ）かよくないからね。そふたろふよ。其代り次／の内閣ハ得するよ。政友会時代にハどふにかせね／ハならないのだからね。そふだろふね。困つたものね。／もふ飯たから帰るよ。そふか。そこと迠て送ろふよ。／門の前てさよならした。／昼食後、やはり風かない。近来珍しいことた。又海岸／をふらついた。不相変人か出て居る。砂山のあたりハ更／に多い。小供とふざけて居る御母さんもある。舟中に坐／を占めて議論して居るものもある。沙上にちゃん／と坐つて話しこんて居る媼さん連もある。種々雑／多た。例の老人先生ハ居ないかな。砂山で新／聞を読むと能く云ふて居たか、もふも居らし／い。何か面白い石てもないかな。行く〳〵下はかり見／てゐたかどふもない。だん〳〵行いて人も稀にな／つて来たから、ふりかへりみれハ宿ハだいふん遠くなつ／た。更に疲労ハ感せんか、もふ帰ろふ。忽ち夕／顔形の石が見付つた。室へ入つた。もふ四時た。睡くて／たまらない。古事読本を読み始めた。どふも睡い。／茶を呑んたり、もるとんを口に入れたりして、五時に〔やつと〕読／み了つた。湯に入つた。誰も居ない。少時くすると大勢／やつて来た。例の老人も来た。今日ハ平塚へ行つて来／た云ふことた。／日記を書いて居たら、九時になつた。ベルを押して新／聞が来ないと尋ねたて見たかこないと云ふ。明日ハ／帰るのたから、止めたのたろふ。牀を展へさした。尚絅堂／集を少し読た。寒いから寝ることにした。

二十日　日

八時に起きた。外ハ風もない。日ハ温かた。然し、今日ハ御／名残た。議会か始まる。当分ハ朝光にも浴することか出／来ない。都合か付けハ、土曜日くらいから一晩か二晩泊りに来／たいものた。朝食後、萬般の荷造をなし拂をも済／したが、また時間か早い。立つて軒に臨んて少時海／を眺めた。日と反映して鏡の様にきら〳〵と輝いて居／る。三崎半嶋と豆相の連山とハ〔互に〕眉黛を〔の〕美を争ふ／て居る。十時四十分になつた。また少し早いか行ふ。十一時／一分に発車した。国府津仕立たものから非常にす／いて居る。一人の老人か居る。鞄に北島とあるから大社／の北島た。禱龍館に来て居たと云ふことた。進んて／一揖した。夫れから、打解けて政海の話をしたか元来素／人た。あまり共鳴しないことかある。一時頃新橋に著／いた。夫れから、車て帰りた。譲

治か非常に喜んだ。留／守中のことを聞いたり、手紙や新聞を見たり／して晩、湯に入りて寝た。